

批判的思考を育む社会科授業の開発 —生徒が自ら疑問を持つことができる授業の工夫を通して—

生井沢 慎之助
教育方法開発コース

1. テーマ設定の理由

(1) はじめに

大学への進学率は年々高まっており、文部科学省の調査によると、高等学校の卒業者が大学・短期大学に進学する割合は平成2年3月には40%に満たないのに対して、令和7年3月には61.4%まで上昇している¹⁾。多くの生徒が大学に進学することで、さらに学びを深めたいという意欲を持っていると考えられるが、大学入試の「受験」のための勉強という意識は、必ずしも変わっていない面もあるのではないだろうか。糸数は教職課程に関する科目を受講する4年次学生を対象に社会科という教科への印象について調査したところ、暗記科目と回答した学生は63.5%、教師が一方的に話していると回答した学生は20%という調査結果が出た²⁾。教育学を学んでいる学生が、社会科に対して暗記科目という印象を持っているということは、受験や定期試験のために、知識を覚えて点数を取るという見方があるのではないだろうか。しかし、これからの社会で主体的に生きるためには自身で考え、実行し再び考えることが必要だと考える。情報化が進んでいる現在では、フェイクニュースや情報格差の問題が話題に上がる。情報1つにしても、これは信頼できる情報なのかを吟味し、精査する力や、適切な資料やデータを入手し、自身の力で情報を読み取る力も必要である。以上から、普通の授業から意識的に内省を行うことができる批判的思考力を育成することが、社会科の目標であるこれからの国際社会を生きる社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の育成につながると考えた。

(2) 昨年度の実践から

昨年度は、「生徒が意欲的に学ぶことができる社会科授業の開発—教材解釈の差異を用いて—」というテーマのもと、中学校2年生社会科・地理分野「日本の諸地域 中部地方」の授業を5時間の構成で行った³⁾。生徒が新しい視点に触れることができる教材を「おもしろい教材」として使用し、①生徒視点からの面白い教材の活用、②生徒が選択して調べ、考えを述べる活動の設定を手立てとして、生徒が意欲的に取り組むことができるよう授業を構想・実践した。その結果、意欲的に話し合うことはできていたが、社会科の目標の達成という点から課題が残った。知識の理解で終わることなく、自分自身が学びを通して持った疑問や気になることを追究していけるような授業を展開したいと考えた。

2. 基本的な考え方

(1) 批判的思考とは

楠見は「批判的思考とは、広範な思考を含む概念であり、さまざまな定義がある」とした上で、それらの共通点に基づいて、3つの観点から以下のように定義し説明している⁴⁾。

①論理的・合理的思考であり、規準 (criteria) に従う思考

規準に基づいて問いを出し、議論や証拠の分析や評価、問題解決、意思決定をおこなう質的に高次 (highest level of quality) の思考である。

②自分の推論プロセスを意識的に吟味する内省的 (reflective) ・熟慮的思考

人は必ずしも①で述べた論理的な思考をおこなうとは限らず、系統的なバイアスが生じることがある。そこで、自分の思考プロセスをモニターし、コントロールするメタ認知的プロセスが重要である。

③よりよい思考をおこなうために、目標や文脈に応じて実行される目標志向的思考

望ましい結果を得る確率を高めるように、認知的スキルを活用した思考活動 (skillful activity) である。批判的思考は、メディアから情報を受け取ったり、人の話を聞いたり、文章を読んだり、観察したり、議論をしたり、自分の考えを述べるときに、何を信じ、主張し、行動するかを決定を支えている能動的・主体的思考である。

(2) 批判的思考を育むには

楠見は、批判的思考の主なプロセスと構成要素について、①情報の明確化、②情報の分析、③推論、④行動決定という4つの要素を挙げて述べており、以下はその要点である⁵⁾。

①情報の明確化

意思決定や問題解決に先立って、そのベースとなる情報を明確に理解することは、それに続く推論や行動決定を適切に行うために必要不可欠なプロセスである。次のような明確化が必要である。

a) 問題、主観、仮説に焦点を当てて、それを明確化する、b) 情報の構造と内容を明確化する、c) 明確化のための問いを発する、d) 用語の定義や比喻や類似などの同定をおこなう、e) 隠れた前提を同定する。

②情報の分析

議論や推論を支える根拠となる主な3つの情報源としては、他者の意見、事実や調査・観察の結果、以前におこなった推論によって導出した結論がある。まず、情報の根拠の確かさについては、意見と事実の判別が必要である。さらに「情報源の信頼性を判断する」、「意見、事実、調査・観察やその報告の内容自体を評価する」について、根拠としての確かさを判断することが必要になる。

③推論

推論には演繹の判断、帰納の判断、背景事実・結果の判断、選択肢・バランス、重みなどの決定に関する判断、倫理などの個人の価値判断が必要である。

④行動決定

①～③のプロセスに基づいて結論を導き、自分のおかれた状況をふまえて、発言、執筆、選択などを支える行動決定をおこない、問題を解決する。こうした批判的思考に基づく結論や自分の主張を他者に伝えるためには、結論や考えを明確に表現し、効果的に伝えるという相手を説得するためのレトリックのスキルが重要である。

本研究では、とくに①情報の明確化における、問いを持つという点に着目し、批判的思考の最初

の段階である問い・疑問を生徒が持つことを重要視して授業を構想した。

3. 実践の概要

上記のような考え方に基づいて、中学校1年生社会科・歴史分野「世界の古代文明と宗教のおこり」(5時間)の授業を実施した。主な手立てについて、以下で述べる。

①生徒が疑問を持つことを促す授業づくり

i) 情報を分析して関係性を調べる・比較する授業場面の設定

疑問を持つことを促すため、実践では疑問に思ったことがあったらワークシートに記入ができるようにした。しかし学習した内容に疑問を持つためには、まずは授業で得た情報・知識を理解して生徒が自分の言葉で整理することや、授業に主体的・意欲的に取り組むことが必要である。

ii) 日常生活と関わりのある、生徒の興味・関心を引く教材の活用

生徒たちの日常にあることを授業の導入に使用することで、社会科の授業と身構えるのではなく、授業内で学ぶことと自分の身の回りのつながりを感じることで主体的に学び、自分の生活との関連で疑問が生まれるようにした。

iii) 疑問の共有、教師も共に課題解決すること

授業を受けた生徒全員がそれぞれの疑問を持つことを目標にはしているものの、難しい面もあると考えられた。そこで生徒から出てきた疑問を授業内や次時で全体に共有をする手立てを行うことで、疑問を持つことを肯定的にとらえる見方を他の生徒にも広げていきたいと考えた。共有する疑問は学習した授業の内容に関係し、かつ生徒の言葉で書かれているものを使用した。筆者も気になった疑問を見つけた時には、実践後できるだけすぐに調べ、共有できるように準備を行った。

②自分の考えを反省的にとらえ深める対話の場の設定

授業で自身が持った考えをグループの中で話し合い、他者の考えについて触れて自身の考えを考え直す時間を設定する。このような思考を実施するために「自分の考えと相手の考えの違いを見つけよう」と発言を行い、自己の考えを考察できるように支援を行う。この自分の考えとの違いから疑問を持つことができるように、生徒の疑問を全体に共有する。

③生徒が意欲的に学ぶことができる教材

本年度も引き続き、生徒が意欲的に学ぶために教材の工夫を行った。社会科が得意と感じる生徒にとっても、苦手と感じる生徒にとっても、意欲的な学びのきっかけになるよう、実践では生徒に身近なものであるが、あまりよくは知らないものを使用した。

4. 実践の考察

今回の単元では、生徒が批判的思考を持つことができる授業を目指し、疑問を持つことができるように手立てを設定して実践した。ワークシートには各生徒が持った疑問を見ることができ、筆者が予想できなかったものもあった。以下では、情報を分析して関係性を調べる・比較する授業場面を設定した第2時の授業で記述された生徒の疑問に着目して考察する。

第2時では、古代文明(メソポタミア文明・エジプト文明・インダス文明)を取り上げ、使用された文字・暦などを知り、文明の発展と地理的要因との関係性を学習した。3つの古代文明の共通点を考え、川・文字・遺跡が文明の発達には必要であると生徒たちは導き出した。この授業で、生

徒Aは「逆に川のないところは文明が発達していないのかしりたい。」との疑問を記述した。古代文明の発達した地域にはいずれも大きな川があるという情報を獲得して、生徒はこの共通点に疑問を持つことができたと考えられる。実際に筆者も同じ疑問を持ち、文献を探してみるとアメリカのマヤ文明が該当した。セノーテと呼ばれる地下水を利用する方法を行っていたものの、マヤ文明は紀元前 1000 年と三大文明と比較すると新しい。この事実を第3時中国文明の導入で使用したところ、生徒から「今日の中国文明でも川が出てくるかもしれない」という主体的に考えることができる発言が出た。

また生徒Bは「この文字を作った経緯と誰が作ったのか。どんな時に作ったのだろう」という疑問を記述した。この疑問は、古代文明が異なる文字を使用したことに注目したものと考えられる。私たちは日本語を普段使用しているが、この言語の始まりを考えることはなかなかないのではないだろうか。この疑問を持つことで、社会科の授業の中だけでなく、自分の話す言葉にまで視点を広げることができる可能性がある。

以上の生徒たちは授業で学んだ知識について疑問を持つことができていると考えられる。授業を通して、批判的思考における情報の明確化と情報の分析についてはワークシートから見とることができる。一部のグループでは、生徒間での話し合いの実態から推論を行っている様子も見られる。今回の実践では、授業の学習課題との関係もあり、行動決定までは見ることはできなかった。

5. 成果と課題

本研究では批判的思考力を育むために疑問を持つこと、対話を行うことを重視し、公民としての資質・能力の育成を目指して実践を行った。批判的思考は、「なぜ？ どうして？」というような、どの教科の学びを行う上でも必要な力を育むことにつながるのではないだろうか。今回の実践では、疑問を持つことを目標として行った。考察で述べたように、疑問を持ったり、対話を通して自身の意見の反省・内省を行う批判的思考を行ったりする場面も見られた。社会科の学習をきっかけに自己の推論・考えを省察できるようになる可能性がある。その上で、生徒がどのような疑問を持つかを授業者側も予測して授業を構想・実践することが必要だと感じた。生徒がこれからの社会を生きる力としての批判的思考を持ち行動決定できるよう、今後も実践の改善に取り組んでいきたい。

注

¹⁾ 文部科学省「令和7年度学校基本統計 調査結果のポイント」令和7年12月26日
https://www.mext.go.jp/content/20251226-mxt_chousa01-000044291_01.pdf
(最終閲覧日 2026年1月21日)

²⁾ 糸数哲「〈実践報告〉教職課程履修中の学生を対象とした「社会科」のイメージ調査」『教職実践研究』(沖縄大学教職支援センター) 第13号, 2023年.

³⁾ 生井沢慎之助「生徒が意欲的に学ぶことができる社会科授業の開発—教師と生徒の教材解釈の差異に基づいて—」『茨城大学教職大学院 学校教育実践研究論集』第3号, 2025年, pp. 83-90.

⁴⁾ 楠見孝「第1章 批判的思考とは」楠見孝・子安増生・道田泰司編『批判的思考力を育む 学士力と社会人基礎力の基盤形成』有斐閣, 2011年, pp. 2-11.

⁵⁾ 同上, p. 9.